

第5回 NEW ギャラリー展 REVIEW

NEW ギャラリー展とは？

—新たなギャラリーでのイベントとして、
新たなギャラリーが集まる場所として、
誰もが、どんなスタイルでも参加できる即興セッションイベント。

第5回目は、山本菜生さんの個展「In between」を開催中のギャラリーにて実施。普段とは違うモノクロームの作品に囲まれてのセッション。

構成は、のこぎり、ギター、踊り、叫び、ギャラリー、写真、たまにクラリネットやおりんなど。個展のお客さまの出入りもあり、10人前後が常に空間にただよう時間になった。

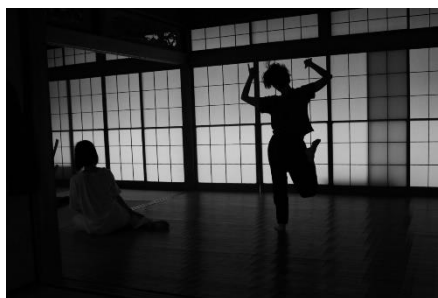


[第1部]

個展に際して閉じていた障子を用いた動きがみられた。1名が縁側で動くことで、障子にその影が映る。障子を隔てて存在する2名は実体と影として結びついているようでありながら、動きを合わせるわけではない。そのズレを、第三者が見つめている。この場だからできる新たな構図の面白さがあった。

一方で、全体的には探り合いが長く続き、誰もにとって印象に残るような場面が少ないものとなっていた。筆者が「あくまでも個展が開催されていることを大切に、個展の空間になじめるように」といったことを話したためでもあると思う。

この点については参加者からも意見が相次いだ。もっと思い切りやりたいがやりきれていない、それぞれがクライマックスに達することができていないなど。場自体の方向を考える必要性を感じる。



ただ、一見すると何も起こっていないように見える何かには、何かにはかない価値がある。現に、静かすぎるという意見もあったセッションのごく前半の時間。エフェクターに繋がれたのこぎりとギター之音。そこに筆者は確かに興奮していた。好みの問題といえば終わりである。ただ、小さな、確実に鳴らされているその音をその場でじっと聴く、その緊張感に胸が高鳴っていた。

交流会では、イベント自体の今後の展開についても話し合う。ある参加者が、イベントが新しいフェーズに入るのかもしれないね、と言ってくれた。場を閉じるという選択肢もよぎっていたが、ひとまず継続することにする。

[第2部]

時間の制限もある中で、15分間限定のセッションを実行。交流会にて、お互いのやりたいこと、やれていないことを確認した上での時間である。

第1部と比較して変化したのは、身体の距離の近さだったと思う。

身体表現を行っていたのは主に3名。全身白っぽい服を着た1名と、全身黒っぽい服を着た1名と、動きやすい恰好で来ようと思っていたのに、いつも通りの服で来ちゃったと話した1名。いつも通りの服で来ちゃった1名が、泣きながら、声を挙げながら、動く。彼女を、白黒の2名が抱きかかえるようなシーンがあった。この抱きしめに存在したのは愛情や慰めというより、例え話に登場するような「天使と悪魔」といった印象であった。

彼女は結局、黒にのしかかれて、果てた。



Photo by Yamamoto Nao

波多野円香 (OHARANO STUDIO GALLERY)